

日本アンダーライティング協会 第74回教育講習会

コロナ後遺症と保険への影響解説

日本アンダーライティング協会は12月8日、第74回教育講習会をオンラインで開催した。ハノーバー再保険グループメディカルオフィサー兼ライフ・リスク・アセスメント部門ゼネラルマネージャーのカプリエル・タイヒマン氏 (Dr. Gabriele Teichmann) が、Long COVID (後遺症) と生命保険への影響をテーマに、これまでの経過、死亡率・罹患率の考察、生命保険への影響と今後の見通しについて解説した。当日のライブ配信とアーカイブ配信で合計126人(2020年12月22日時点)が視聴した。

タイヒマン氏は、症状がみられること、死亡率・罹患率の考察

これまでの経過として、また、多臓器障害によりさまざまな持続的症狀が現れる可能性がある。Long COVIDの症状は変異株により異なり、200項目以上の症状が該当することがある

各国の死亡率・罹患率調査から考察

初期から継続する場合と、回復後から開始する場合があり、時間の経過とともに現れたり消えたり、または再発することがあり、女性に多く、他の診断名では説明できない

死亡率・罹患率の考察になることを示した。エスニアの長期死亡率調査では、感染から35日までの重篤・重症・非重症者それぞれの死亡率に大幅な違いがあることや、60歳以上では感染から85日以降の死亡率が非



講演するタイヒマン氏

性的疾患や持続的後遺症が、各国のさまざまな調査からはLong COVIDの影響が発生する患者は2〜80%にわたるとい見解も発表されていることを説明した。生命保険への影響と今後の見通しでは、「Long COVIDは不明点はまだ多く、症状の悪化や長期持続するリスクに対してアンダーライティングがどこまで対応できるかという局面に立ち、また、これから蓄積されていくさまざまな情報や科学的進展に応じて、リスク要素の考慮や料率の見直し、引受基準の見直しを行っていく必要がある」との考えを示した。タイヒマン氏は最後のまとめで、Long COVIDの死亡率は増加し、時間の経過とともに横ばいになる傾向があるが、現在の調査期間の12カ月間を超えた場合の影響も今後注視していく必要があるとし、「今後の展望として私たちはCOVID-19とともに生きるといことを受け入れなくてはならない」と語った。(文責:大同生命契約審査課<東京>寺前皓子)

COVID-19の長期的な神経学的転帰のリスク調査では、非感染者と比較した場合、感染者は入院がな

た、治療は複雑で難しく、国によってはLong COVID患者を支援する設備や組織を立ち上げ、ガイドラインを構築して治療に当たっていることを説明した。

感染者と比較して高くなることを示した。オランダの感染前後症状の報告では、女性の方が感染後に全身倦怠感を生じる確率が高くなっており、また、各国のLong COVID-19の長期的な神経学的転帰のリスク調査では、非感染者と比較した場合、感染者は入院がな